

手書きの壁新聞

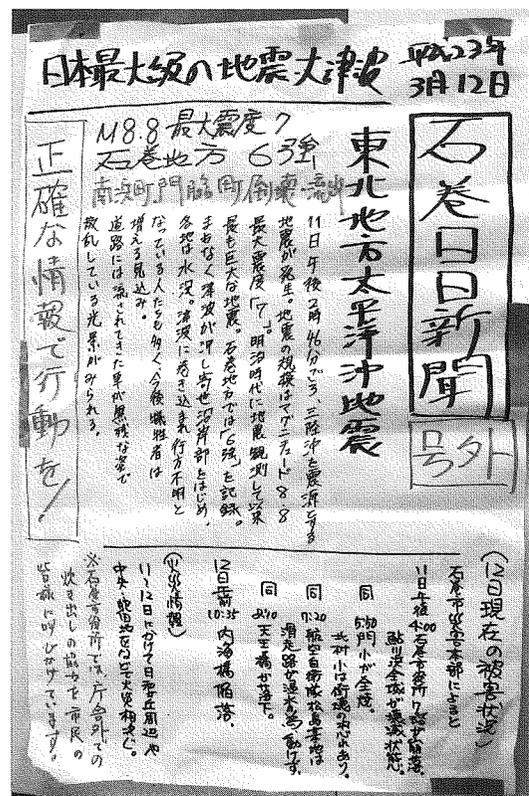
ここに1枚の壁新聞があります。ただの白い紙に黒と赤と青のマジックで手書きしたものです。まるで学生が作った新聞のように見えるかもしれませんが、上部の見出しと右上の日付をよく見ると、「日本最大級の地震・大津波 平成23年3月12日」と書いてあります。この新聞は2011年3月11日の東日本大震災の翌日、地元（いしのまき）の小さな新聞社、石巻日日新聞社の記者たちが作ったものです。

石巻市は宮城県の北東部の海に面した人口16万人ほどの市ですが、東日本大震災では、地震による津波で町は大きな被害を受け、約3500人も（いしのまき）の市民が死亡、行方不明となりました。石巻日日新聞社も会社の建物が水に浸かり、建物全体が停電し、印刷機など機械が使えなくなってしまいました。新聞の発行などとてもできない状態でしたが、余震が続く中、記者たちは「紙とペンさえあればいい」と手書きの壁新聞を発行することにしました。社長以下記者たち皆が被災者で、家族の安否も確認できない状態でしたが、「地域がこんなときに何もなかったら、自分たちの存在を自分たちで否定することになる」と考え、決断したのです。

記者たちは、泥水の中を歩いて市役所や警察を回り、避難所を訪ね、町の様子を見て、情報を集めました。各避難所の場所や、水や食べ物の配給、道や橋が通れるかどうかなど、避難所に逃げてきた人々にとって必要と思われるものを選んで書いていきました。「正確な情報で行動を！」——紙面に赤いマジックで書かれたその短いフレーズは、状況がわからずパニックになりがちの人々の心をどんなに落ち着かせてくれたことでしょうか。記者たちは自らが被災者であっただけに、今ほしい情報が誰よりもわかっていたのです。何もわからないということは不安を呼び、ストレスになります。「情報もまた、電気や水道と同じライフラインだ」、日日新聞の記者たちはそう思ったそうです。3日目からは見出しに「全国から物資供給」「支え合いで乗り切って 全国から激励のメッセージ」と「希望が見える」ものを取り上げました。大変な状況の中で前を向いて生きていくのに、情報が希望になると気付いたからです。結局、この壁新聞は会社に電気が通って、通常の仕事ができるようになるまでの6日間、市内の避難所6か所に貼り出されました。

このことがアメリカの新聞ワシントン・ポストを通じて報道され、壁新聞は世界中で有名になって、ワシントンにあるニュース・ジャーナリズム博物館ニュージウムに永久保存されることになりました。また、日本国内のみならずパリでも展示が行われ、多くの人々が記者たちの「伝えなければ」という使命感を肌で感じました。

さまざまなメディアが発達し、毎日情報の洪水の中（いしのまき）にいる私たちに、手書きの壁新聞が改めて情報の大切さを教えてくれたのではないのでしょうか。



石巻日日新聞社：  
宮城県石巻市にある地域新聞社。  
1912年創刊。社員20人余り

- 1. この手書きの壁新聞はいつ、誰が作ったのですか。
- 2. 記者たちはどうやって情報を集めましたか。
- 今までに「この情報があってよかった」「情報がなくて困った」という経験がありますか。それはどんなときでしたか。

ことば

壁新聞	マジック	上部	見出し	日付	平成	翌日	新聞社
死亡-する	行方不明	浸かる	～機(印刷機)	発行-する	安否	存在-する	否定-する
決断-する	泥水	警察	訪ねる	配給-する	正確(な)	紙面	フレーズ
パニック	自ら	ライフライン	物資	供給-する	支え合い	乗り切る	激励-する
通常	～か所(6か所)		貼り出す	報道-する	永久保存-する		使命
発達-する	洪水(情報の洪水)		改めて				